

## まえがき

多数派 (majority) の男性の一人であるこの私は、今、何をどうすればいいのだろうか？

……そうした私自身の戸惑い、取り乱し、問い直しの中で本書は書かれた。

私は男性問題の専門家でも何でもない。ただの素人であり、アマチュアである。

それでも、自分なりに男性問題について基本的なところから——フェミニズム、ジェンダー論、男性学などについて基礎的に学びながら——考え直してみたかった。

最低限これは必要と思われる情報や知識を整理し、男性問題を今後も考え続けていくための、ひとまずの足場を作っておきたいと思った。そのために、あえて、入門的な文体を選んだ。

いや、「入門書」というよりも、手がきの地図を作成してみた。あるいは、迷いがちな土地を旅するための基礎知識や標準装備を記したパンフレットを手作りした。そうした感覚に近い。

そして、そうしたささやかな手仕事は、自分以外のほかの人々、男性問題についての戸惑い

や失語を抱えた皆さんの参考になれば。少しでも役立てば。そうした思いがあった。

男性たちのハラスメントや性暴力を批判し、男性特権に基づく不正な男社会の変革を求める女性たちの声。あるいはリベラルで個人主義的な自由と多様性を求める声……。そうした声は日増しに響き渡り、世界中で大きく共鳴しつつある。

他方では、女性たちの「行き過ぎた正しさ」(?!?)を批判し、抑圧し、性差別を固定しようとする声たちも依然として根強くある。俺たちは差別ではなく区別しているだけだ、資源を奪われ不当に差別されているのは多数派のほうだ、「強者女性」よりも「弱者男性」のほうが過酷な状況にある、マスコミやメディアは真実を覆い隠している……。

多数派の男性と女性や性的マイノリティの間にあるのは、対等な立場同士の「分断」ではなくて、非対称で不正な「落差」といべきものだろう。

そうした状況の中で、この私もまた性差別や女性憎悪を批判し、ジェンダー平等を求めたいと願う者の一人だ。だがそれは他者たちのため、というだけではない。多数派の男である私(たち)自身の解放や自由のためで(も)ある。

とはいえ、多数派の「男」である以上、女性解放や#MeTooに直接自分の声を重ねたり、性差別に対する怒りを主張する資格があるのか。自分たちの特権や思い込みを突き崩される痛

みや葛藤なしに、社会批判的な言葉を口にできるのか。それもまた、女性や性的マイノリティ当事者の声を代弁したり、掠め取ったり、盗用したりすることではないのか。

他人事ひとごとのように誰かを批判し槍玉やりたまにあげるのみならず、自らの足元をつねに同時に問わざるをえないだろう。しかも、スマートに性差別や男性特権を反省してみせ、周囲の男性に対する卓越化とマウンティングをはかる似非えせリベラル的なポーズとは異なる形で、男であることの検証と内省が試みられねばならない。そして私たちはもはや性・民族・障害などの複合差別を交差的に問うことを回避できない。

——では、あらためて、多数派の男性たちは、いったい、何をどうすればいいんだろうか？ そうした率直な困惑があり、戸惑いがあった。考えれば考えるほど、うまく考えられなくなってしまう。言葉を失って、沈黙の中に落ち込んでしまう。

どんなにジェンダー不公正や性差別について勉強してみても、暮らしの中で女性や性的少数者の知人・友人と会話し対話を重ねても、この素朴な戸惑いや失語が消えることはないだろう。もし男たちのそうした戸惑いが——本当にフェアな社会と意識がひろがったがゆえに——消えたならば、人類は新たな段階に達した、とようやく欺瞞ぎまんなく言えるのだろう。しかしそれははるか遠いことのように思える。

常日頃から戸惑いや取り乱しを抱え込んでいる男性たち、迷える多数派の男たちのためのまっとうな教科書のようなものが必要であり、しかもそれはできるだけたくさん必要であつて、この本もその中の一冊になればいい、と思つた。啓蒙的けいもうであろうとすることを恐れてはいけな——それは自己啓蒙を含むだろう——と思つた。

私は差別という言葉の定義上（第一章を参照）、基本的に「多数派の男性たちもまた差別されている」とは言えないと考える。男性と女性や性的少数者の間には、法・制度・構造のレベルで圧倒的な非対称があるからだ。

しかし、たとえ構造的・制度的な差別を受けていなくても、男性たちもまた、不当なレッテルやステレオタイプ（それは時に反差別やフェミニズムを偽装した男性憎悪<sup>ミサンドリー</sup>による場合もある）を押しつけられたり、職場や学校内で女性からのハラスメントを受けたりすることはある。あるいはまた、現在の環境や制度から特定の正規的な「男らしさ」を選ばされる、という抑圧を受けたり、特権や尊厳の維持のために多大なコストを支払わされて不幸になつていく、ということもある。

おそらくその辺りまでのことは言える。

だから、行き過ぎた被害者意識に陥ることなく、かといつて自分の中の恐怖心や傷をなかつ

たことにするのではなく、多数派の「男」の立場から、性差別やジェンダー不公正の問題に立ち向かっていくべきだし、それは可能である。そうした道筋を本書では考えてみたい。

男たちもまた不幸でありうるし、心身に傷を被っているし、(たとえ差別はされていずとも)不自由な抑圧に苦しめられている。その事実をひとまず認めてよい。さもなくば不自由さや剝奪感が一層強まり、被害者意識に呪われたり、他者への憎悪を強めたりしてしまう。内なる傷の痛みを被害者意識(男たちも差別されている!)へとこじらせてしまう。そうならないためには、さまざまな知識が必要であり、生活上の自己改造が必要である。

自分たちを変えていくこと。自分たちの欲望と生活を改良しながら、不公正なこの社会を改革していくこと。自己改良と社会変革を重ねながら、まっとうな多数派の「男」になっていくこと。それは可能であるはずだ。被差別や犠牲の当事者としての怒りではなく、今の社会の中で男であることの恥ずかしさによって#MeTooに声を重ねること。いわば、メンズリブ(男性解放)のためのマジヨリティ運動。それもまた、可能であるはずだ。

常日頃から戸惑ったり、取り乱したりしながら、自分の足元を問い直し、性差別的でジェンダー不公正なこの社会・制度・構造を変えていこうとする男性の皆さんと——その場合ももちろん、女性や性的マイノリティの人々の歴史に学びながら、外なる他者の声を内側に響かせな

がら——ともに、何かを考えていくことができれば。  
そんなことを願って、本書を書いてみた。

# 目次

## 第一章 多数派の男たちは何をどうすればいいのか

多数派の男たちは何をどう考えていくべきなのか？

自分を変える、社会を変える

「何が差別なのか、この私にはわからない」からはじめる

構造的課題としてのミソジニー

マジヨリテイ問題としての男性問題

マジヨリテイであり続けることのコスト？

マジヨリテイはいかにして変わりうるか

## 第二章 ヘテロ男性とは誰のことか

性別・性差・性役割

肉体的性別・性自認・性的指向



ホモセクシュアル・ゲイ・レズビアン  
性同一性障害・トランスセクシュアル・トランスジェンダー  
クイアとは誰か

### 第三章 『マッドマックス 怒りのデス・ロード』を読み解く

男性たちの惨めな零落とシスターフッド  
マックスにはなぜ居場所がないのか  
マックスにとって自由とは何か

75

### 第四章 ヘテロ男性は変わりうるか——複合差別時代の男性学——

93

交差的な複合差別を解きほぐす  
ブラックフェミニズムと「自らの内なる敵」  
多文化共生時代のジレンマ  
トランスフォビアとトランスフェミニズム

## 第五章

グローバルな「被害者意識」に抗して  
保守的・リベラル・questioning  
マジョリティ・メンズリブ

### 『ズートピア』を読み解く

---

複合差別時代のズートピア？

ズートピアの中の性差別・性暴力

傷つけられた者たちによる友愛

来るべき未来のリベラルズートピアへ

## 第六章

### 多数派の男たちにとってまっとうさとは何か

---

有害で有毒な男性性？

男にとって「傷つけられやすさ」とは何か

正しさ・まっとうさ・社会正義

## 第七章 男たちはフェミニズムから何を学ぶのか

リベラル・ソーシャル・ラディカル——フェミニズムの三項図式

ジェンダー論は進化⇨深化する——自己発展としてのフェミニズム

ラディカルフェミニズム再興——「性差別」と「性支配」

ラディカル・メンズリブのために

## 第八章 ポストフェミニズムとは何か

ポストフェミニズムとネオリベラリズム

ポピュラーでセレブリティで企業的なフェミニズム？

ポストフェミニズムと第三波フェミニズム

多数派男性たちにとって #MeToo とは何か

女性たちの内側の階級問題

## 第九章 剝奪感と階級——『ジョーカー』を読み解く——

『ジョーカー』にとつて男性性とは何か

マジヨリティたちの剝奪感と「深層の物語」

「九九%」のためのフェミニズム

階級闘争としてのメンズリブ？

## 第一〇章 複合階級論に向けて——ラディカル・メンズリブのために——

階級映画かデフレ映画か——『バラサイト 半地下の家族』

階級闘争とフェミサイド——『バーニング 劇場版』

複合差別時代のミソジニー

——『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド』

複合差別時代の黒人差別——『アス』

『トイ・ストーリー4』をメンズリブから読み解く

『トイ・ストーリー4』のアンキーズム

アナーキーとしてのメンズリブへ！

——『万引き家族』と『わたしは、ダニエル・ブレイク』

あとがき

註